杜　甫 下

黑川洋一注

中國詩人選集10

中国詩人選集　第10巻

昭和三十四年三月二十日　第一刷発行©

定価二二〇円

注者　黒川洋一

東京都千代田区神田一ッ橋二丁目三番地
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

発行所　東京都千代田区神田一ッ橋二ノ三　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

目次

解説……三
飲中八仙の歌……一五
兵車行……一九
麗人行……二五
従孫の済に示す……三〇
京より奉先県に赴くときの詠懐、五百字……三四
王孫を哀しむ……四九
江頭に哀しむ……五四
懐いを述ぶ……五八
羌村三首……六三
北征……六九
彭衙行……九〇
衛八処士に贈る……九六
新安の吏……一〇〇
潼関の吏……一〇四
石壕の吏……一〇七
新婚の別れ……一一〇
垂老の別れ……一一五
無家の別れ……一二〇
李白を夢む二首……一二四
鉄堂峡……一三〇
石龕……一三三
乾元中、同谷県に寓居して、作れる歌七首……一三五

剣門……一四五
成都府……一四九
茅屋　秋風の破る所と為る歌……一五二
冬、金華山の観に到り、因りて故の拾遺
　陳公の学堂の遺跡を得たり……一五六
草堂……一五八
縛鶏行……一六八
公孫大娘の弟子の剣器を舞うを観る行
　并びに序……一六九
歳晏行……一七七
年譜……一八一
跋……吉川幸次郎……一九三
略図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

解説

一

上冊ではもっぱら杜甫の今体詩を収めたが、この冊は古体詩をおさめる。また上冊の解説においては、杜甫の生涯と、その詩の特質について説いたが、ここには、主として杜甫の詩の後世に及ぼした影響について解説することとする。

二

杜甫は、その国の人人によって、「詩聖」つまり詩の聖人として、他のいかなる詩人にもまして高い尊敬を払われてきた。もっとも杜甫と並び称される詩人がないではない。それは杜甫の友人の李白である。しかしながら二人は併称されながらも、けっきょくは杜甫の方により高い地位が与えられるのが、普通である。ところで、そうした杜甫に対する評価が確定を見たのは、いつごろからのことであろうか。

杜甫が偉大な詩人として、世に認められるのは、その詩の偉大さにもかかわらず、その生前にあってのことではない。生前にあっては、わずかに孟雲卿（七二九—?年）、元結（七二三—七七二年）らが、その現実主義的作風に同調したにすぎず、その名声はとうてい友人の李白にはくらぶべくもなかった。杜甫の

詩が、はじめて世に認められるのは、その死後四十年ばかりをへだてる唐中期のころのことである。

当時の文壇を代表する人物は、韓愈、字は退之（七六八—八二四年）と、白居易、字は楽天（七七二—八四六年）であるが、かれらはともに杜甫の熱心な崇拝者であった。韓愈は「張籍を調る」の詩に李杜をたたえて「李杜に文章有り、光焰は万丈も長し」（本選集「韓愈」二六ページ）といい、白居易は「元九に与うる書」に李杜を論じて「又た詩の豪なる者、世に李杜と称す。李の作は、才奇にして、人は逮ばず。其の風雅比興を索むるに、十に一も無し。杜詩は最も多く、伝う可き者、千余篇あり。今古を貫穿し、格律を飜縷し、工を尽くし善を尽くすに至っては、又た李に過ぐ。」という。なお白居易の作のうちみずからがもっとも高く評価したその「諷諭」の詩は、杜甫の「三吏三別」（本書一〇〇—一二四ページ）の詩を手本とし、その詩のもつ社会性を、いっそう自覚的に発展させたものであった。

また白居易の友人元稹、字は微之（七七九—八三一年）も、白居易に劣らぬ熱烈な杜甫の崇拝者であり、杜甫のために墓誌銘を書いたが、それには杜甫をたたえて、「上は風雅に薄り、下は沈宋を該ね、言は蘇李を奪い、気は曹劉を呑み、顔謝の孤高を掩い、徐庾の流麗を雑え、尽とく古人の体勢を得、而して今人の独り専らとする所を兼ねたり。」とし、その結論として、「詩人あって以来、未だ子美（杜甫の字）の如き者は有らず。」という。風雅とは「詩経」のことであり、沈宋とは初唐の沈佺期・宋子問のことであり、蘇李とは前漢の蘇武・李陵のことであり、曹劉とは後漢末の曹植・劉楨のことであり、顔謝とは宋の顔延年・謝霊運のことであり、徐庾とは梁の徐陵・庾信のことである。要するにそれら古来の中国の詩の伝統は、すべて杜甫の詩のうちに活潑にはたらいているというのである。さらに李白との優劣を論じては、「終始を鋪陳し、声韻を排比し、大は或いは千言、次は猶お数百、辞気は豪邁、風調は清深、属対は律切

にして、凡近を脱棄するが若きに至りては」、李白もとうてい杜甫の足下にもよりつけぬと評している。

晩唐のころの評価としては、杜牧、字は樊川（八〇三—八五二年）の「杜詩を読む」の詩に、「杜詩と韓筆とは愁い来たって読めば、麻姑を倩いて痒き処を搔くに似たり」という。麻姑とは、長い爪をもつ仙女の名であるが、杜甫の詩と韓愈の文は、あたかもその仙女にたのんでかゆいところをかいてもらうがごとくに、凡人の云い表わせぬところを適切に表現しているというのである。杜牧をはじめとして、晩唐の詩人のなかには、李商隠（八一二—八五八年）、皮日休（八三三—八八三年）、杜荀鶴（八四六—九〇四年）など、杜甫の影響を受けたものは少なくないが、当時の詩壇の一般的傾向は、唯美的、頽廃的であり、けっきょく杜甫の詩は、この時代にはあまり行なわれなかったといってよろしい。

杜甫の詩が、詩壇にその地位を確立するのは、次の北宋の時代にいたってのことである。もっともそのはじめは、晩唐・五代の詩風をうけて、華麗繊細な西崑体が支配的であり、その代表的詩人、楊億、字は大年（九七四—一〇二〇年）のごときは、杜甫の詩を好まず、杜甫をよんで「村夫子」、つまり田舎ものといったという話が宋の劉攽の「中山詩話」に見える。杜甫の詩が、その価値を再発見されるのは、十一世紀、北宋も半ばを過ぎるころのことである。

当時の詩壇を代表するものは、欧陽修、字は永叔（一〇〇七—一〇七二年）、王安石、字は介甫（一〇二一—一〇八六年）、蘇軾、字は子瞻（一〇三六—一一〇一年）、やや後れては黄庭堅、字は魯直（一〇四五—一一〇五年）らであるが、うち欧陽修を除く三人はいずれも杜甫の詩を愛し、極力これに学ぼうとしたといわれる。なかでも王安石はもっとも杜甫の詩を酷愛し、その早年、鄞県（浙江省）の令であったころ、杜詩二百余篇を得てこれを刻し、その序文には「予、古の詩を考うるに、尤も杜甫氏を愛す。」という。

のちまた、かれは「四家詩」（その書は亡ぶ）を撰んで、杜甫・欧陽修・韓愈・李白の順にならべたという話が、宋の胡仔の「苕渓漁隠叢話」に見える。これらをもってしても、安石がいかに杜甫を尊敬したか、その一端をうかがい知ることができよう。安石が、仁宗の朝、新法を立てて弊政を改革し、人民の困窮を救おうとしたことも、みずからの行動を杜甫の詩の影響の下におこうとしたものといっても、あながち過言とはいえまい。

また蘇軾は北宋一代の大詩人として、当時の文学の方向を定めた人物であるが、かれもまた杜甫の詩を尊敬したことは、「王定国詩集序」に「古今に詩人衆し、而して杜子美を首と為す。」とあるのによっても知られる。またその門人、黄庭堅は、南宋一代を風靡した江西詩派の祖であるが、かれもまた杜甫の詩の忠実な祖述者であり、「大雅堂の記」には、「杜子美由り以来、四百余年、斯文は地に委つ。文章の士は、世の能くする所に随い、時輩に傑出し、未だ子美の堂に升る者有らざるなり。況んや室家の好をや。」という。

これら北宋末の代表的詩人が、ともに杜甫を高く評価したことは、杜甫の詩がその地位を詩壇に確立するうえに、ほとんど決定的な役割りを果たしたといってよろしい。また逆にいえば、中国の社会は、このころにいたり、はじめて杜甫の詩を受け入れるまでに進歩したということができるであろう。ともかくこのころより、ようやく杜甫をもって中国最高の詩人とする認識は、確定を見るにいたったのである。

かくて、その詩は、南宋・元・明・清をへて、民国初年の文学革命に至るまで、中国の詩の完全な典型として、多くの詩人たちによって祖述しつづけられたのである。要するに北宋以後の中国の詩の歴史は、杜甫の詩の祖述の歴史であったといってもさしつかえない。文学革命が、従来の中国文学の伝統をたちきって、ヨーロッパ近代文学の影響のもとに、みずからの文学をおくことを宣言するに及び、はじめて杜甫

の詩に対する直接の祖述はやんだとはいえ、杜甫の詩をもって中国最高の詩とする認識は、その大きな転換をのりこえて少しもゆるぐことはなかったのである。またごく最近の中国についても、その事情はいぜんとしてかわらず、その詩は現実主義の文学として、人民の文学として、以前にもまして一そうの敬意がはらわれていると見うけられる。

さいきん出版された蕭滌非の「杜甫研究」上巻（一九五四年、山東人民出版社）のつたえるところによれば、杜甫がかつて四年余りを過ごした成都の寓居、いわゆる浣花草堂（上冊巻頭の写真を参照）には、杜甫のテクストならびに資料四百四十二部、三千七百七十余冊をはじめ、元以後の杜甫像二十数種などが収集されているという。これをもってしても、杜甫が後世、いかに高い尊敬をはらわれてきたか、その一斑をうかがい知ることができよう。

三

次に、杜甫の詩のわが国への流伝と、国文学に及ぼした影響について述べておく。

杜甫の時代は、わが国の歴史でいえば、元明天皇の和銅五年（七一二年）より、光仁天皇の宝亀元年（七七〇年）まで、つまり奈良朝の初期より末期にかけてである。

ところで杜甫の集が、はじめてわが国にもたらされたのはいつのころのことであろうか。宇多天皇の寛平年間、つまり九世紀の終りごろ、藤原佐世（？—八九八年）の撰になる当時の漢籍目録「日本国現在書目録」には、杜甫の集は記載されておらぬところよりすれば、杜甫の集は当時まだわが国に伝わっておらなかったのであろうか。杜甫の集がはじめて明記される文献は、管見にふれるところ、大江匡房（一〇四

一一一一一年）の「江談抄」をもって最初とする。それにはいう、「又た命ぜられて云う、注王勃集・注杜工部集等、尋取する所なり。元稹集は、度度唐人に誂うと雖も、求め得ず。」（第五「詩事」）と。とすれば、杜甫の集が、はじめてわが国にもたらされたのは、平安朝の末、つまり十一世紀のころと断定してもよろしいのであろうか。

しかしながら、そう断定するのはいささか早計に失する。なんとなればそれ以前のものに杜甫の詩を典故として使用した例を見出だすことができるからである。高木正一氏の発見するところによれば、嵯峨天皇の御代になるわが国人の漢詩集「文華秀麗集」に載せる菅原清公（七七〇—八四二年）の詩「春の閨怨に和し奉る」に、「妬む可し桃花は徒らに靨に映じ、生憎や柳葉は尚お眉を舒ぶ」とあるのは、明らかに杜甫の七律「路六侍御の入朝を送る」に、「不分や桃花は紅なること錦に似たり、生憎や柳絮は綿よりも白し」をふまえたものである。また小川環樹先生の教示によれば、大江維時（八八八—九六三年）の撰になる「千載佳句」には、杜甫の詩のうちより句六聯をえらんでおさめる。また藤原基俊（一〇六三—一一四二年）の撰になる「新撰朗詠集」にも、杜甫の句二聯をえらんでおさめる。これらが直接に杜甫の集によったものかどうかは、なお疑う余地はあるが、杜甫の詩が早くよりわが国人によって読まれていたことを示す貴重な資料ではある。

しかしながら、平安朝においてもっとも多くの読者を獲得した中国の詩人は、いうまでもなく白居易であって、杜甫ではない。杜甫が、白居易にかわってもてはやされるにいたったのは、次の鎌倉・室町に入ってからのことである。その発見者は、王朝貴族にかわって新たに学問のにない手となった五山の学僧たちであった。鎌倉の末期から室町の初期にかけて、五山文学はその最盛をほこるが、虎関師錬（一二七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

―一三四六年）の「済北集」・中巌円月（一三〇〇―一三七五年）の「東海一漚集」・義堂周信（一三二五―一三八八年）の「空華集」・絶海中津（一三三六―一四〇五年）の「蕉堅稿」など、五山の名だたる学僧の詩文集のなかには、杜詩に言及するものが少なくない。また義堂の門生、心華元棣は杜詩に詳しく、その注釈書「心華臆断」（未見）は、わが国人の手になるもっとも早い杜詩の注釈書であり、絶海の門生、江西竜派（一三七五―一四四六年）には「杜続翠抄」（京都建仁寺両足院所蔵）なる詳細な杜詩の注釈書がある。なお吉野朝時代には、元の高楚芳の「集千家註批点杜工部集」二十巻の五山版が二種類も翻刻されたが、それはわが国における最初の杜詩の版本として珍重される。本書の巻頭にかかげる写真二葉のうちの一葉は、神田喜一郎博士所蔵のものからの複写である。

この時代における国文学への影響としては、「太平記」に、尹大納言師賢の流刑を叙して、「盛唐の詩人、杜少陵、天宝の末の乱に逢て「路経灩澦双蓬鬢、天入滄浪一釣舟」と天涯の恨を吟じ尽し、云云」（巻四「笠置囚人死罪流刑事」）とあるのは、杜甫の七律「将に荊南に赴かんとして、李剣州に別る」にもとづくものであり、また謡曲「百万」に「勝やおもんみればいづくとても住めば宿、すまぬ時には故郷もなし。此世はそもいづくのほどぞや。牛羊径険にかへり、鳥雀枝のふかきに集まる。」とあるのは、五律「暝」にもとづき、同じく謡曲「芭蕉」に「一樹の陰の、庵りの内は、惜しまじな、月もかりねの露の宿、〳〵、軒も垣ほも古寺の、うれひは、崖寺のふるにやぶれ、魂は山行の、深きに痛ましむ、月の影もすさまじや。」とあるのは、五古「法鏡寺」にもとづき、さらに同じく謡曲「俊寛」に、「時を感じては、花も涙をそそぎ、別れを恨みては、鳥も心を驚かせり。」とあるのは、五律「春望」（上冊四七ページ）にもとづくことを指摘し得る。

江戸時代にいたり、学問の興隆と、その普及にともなって、杜詩の読者もまた、一そうその範囲を拡大し、杜詩を尊重する風は、ようやく一般的となった。この時代にひろく行なわれたテクストは明の邵傅の「杜律集解」をはじめとして、杜甫の律詩ばかりを選んでおさめるものであり、また大典禅師の「杜律発揮」、宇都宮遯庵の「杜律五言集解詳説」、津阪孝綽の「杜律詳解」などの注釈書も、律詩のみを選んで注解をほどこしたものであり、そこにこの時代の一つの偏見が認められる。

この時代には、石川丈山（一五八三―一六七二年）、林羅山（一五八三―一六五七年）、那波活所（一五九五―一六四八年）、伊藤坦庵（一六二三―一七〇八年）ら、初期の名儒をはじめとして、数多くの杜詩の追随者が輩出したが、なかでも杜甫を厚く尊敬し、その詩心に深くふれたものとしては、俳人松尾芭蕉（一六四四―一六九四年）をもって第一とする。芭蕉は、杜甫ほどには社会的ないしは政治的関心をもちあわせなかったとはいえ、その気質の上においては、杜甫と相い類似する点が多く、つねに杜甫の心酒をなめ（「虚栗」跋）、その負い笈の中には、いつも杜工部集を入れていたといわれる（暁台「花屋日記」）。芭蕉の俳句・俳文のうちには、直接には杜甫の詩を典故とし、間接には杜甫の詩に暗示を得たと思われるものが少なくない。わたくしは、上冊において、杜詩に暗示を得たと思われる句のいくつかを、そのつどつどに指摘しておいたので、参考にしていただければ幸いである。おそらくは芭蕉こそは、わが国における真の杜甫の発見者であったといえよう。

なお、国文学に与えた杜甫の影響については、まだ十分の調査、研究がなされておらず、したがってわたくしの叙述も、はなはだ不完全であることをつけ加えておく。

四

おわりに、杜甫のテクストについてふれておく。

「旧唐書」の杜甫伝、ならびに「新唐書」の芸文志によれば、がんらい杜甫の集は六十巻あったという。また杜甫の死後まもないころの樊晃の「杜工部小集」（その書は亡ぶ）の序文にも、杜甫の集は六十巻と見える。しかしながら六十巻本の杜甫の集は、早く亡んだものと見え、後には伝わらぬ。

今に伝わるもっとも古いテクストは、北宋の仁宗皇帝の宝元二年（一〇三九年）、王洙の編になる「杜工部集」二十巻である。その体裁は、詩十八巻と、賦筆雑著二巻とよりなり、詩は古体と今体に分かたれ、そのおのおのにおいて編年の体をとる。そのもとづくところは、宋の秘府、ならびに諸家の蔵本など、九十九巻であり、そのうちより重複を省いて、千四百五篇の詩と、二十九篇の散文を収録したという。仁宗の嘉祐四年（一〇五九年）、王琪は、この王洙本にさらに元稹の作る杜甫の墓誌銘をそえてこれを刻したが、その刻本は完全には後に伝わらず、今見得るものは、後の版本によりその残闕を補なったものである。

その後、英宗の治平年間（一〇六四―一〇六七年）、裴煜が、さらに遺文四篇と、遺詩五首を得て補刻したのをはじめとして、遺文・遺詩拾集の努力がつづけられたが、ついに若干の詩をつけ加え得たにとどまり、もっとも詩数の多い清の銭謙益本にしても、千四百五十六首、同じく清の朱鶴齢本にしても、千四百五十七首の詩を収めるにすぎない。なお現存するテクストには、三十歳以前の詩はほとんど無く、せいぜい多く数えても十首に満たぬが、それは杜甫みずからがその早年の詩の未熟を不満として、棄て去ったものかと想像されている。また古来のテクストの体裁としては、王洙本・九家集注本・銭謙益本のごとく、

古体と今体とに分かち、そのおのおのに編年の体をとるもの、草堂詩箋本・千家注本・詳註本のごとく、純粋に編年の体をとるもの、分門集註本・分類集註本のごとくに、詩の内容によって部門分けにするものがあるが、それらのもとづくものが、主として王洙本であるとするならば、古今二体に分かつ形が、もっとも古い姿であるとせねばならぬ。

巻頭の写真二葉のうちの一葉、瞿唐峡は、揚子江の険所として名高い三峡の一つであり、上冊の「瞿唐両崖」(一七九ページ)の詩は、その状景をもっともよく伝えるものである。合わせ味わうならば、興は一そうに深いであろう。写真は上冊の浣花草堂とともに、名取洋之助氏の撮影である。

なお上冊の解説に、古体の詩型については下冊の解説に説くとのべたが、本書に先んじて小川環樹先生の「唐詩概説」が出たので、その解説は同書にゆずり、本書には省略させていただくこととした。

杜

甫

下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com